
ハルケギニアの獅子心王

肥前のポチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルケギニアの獅子心王

【Nコード】

N7172X

【作者名】

肥前のポチ

【あらすじ】

ゼロの使い魔の世界に冴えないサラリーマンの主人公が迷い込む？主人公は仕事の帰り突然ゼロの使い魔のハルケギニア大陸に来ることになる。

召還された訳でもなく、誰かに憑衣した分けでもない主人公がゼロの使い魔の世界を生きていく。

原作ブレイクになると思いますので、ルイズファンやサイトファンは読まない方が良いと思います。

私の文は駄文です。

それでもOKだという心優しい方は読んでください。
駄文なんて許せない！と、言う方は申し訳ないですが読まないで
ただけるとありがたいです。

プロローグ 転生？憑衣？（前書き）

まだ恋姫の二次小説を完結させていないのに、ゼロ魔の二次小説を書いてしまいました。

大まかなプロットはありますが、詳細なプロットはないので自転車操業になると思います。

恋姫の二次小説も完結するつもりなので頑張ろうと思います。

ブログ 転生？憑衣？

俺は仕事を終え、帰宅の途についた。

「疲れたな………」

会社を出ると人通りも疎らで空には月が出ている。

今日は早く帰ってのんびりしよう。

運動不足なので歩きで会社と自宅の間を往復している。

始めた頃は体に堪えたが、大分慣れてきた気がする。

と、言いたいところだが、三日坊主ならぬ二週間坊主になりそうだと、

仕事が終わって家まで片道10キロ位の道のりをウォーキングするのが日課になっている。

俺は歩きながら心の中で愚痴をこぼした。

俺がウォーキングを始めた理由は体型がデブになってしまったからだ。

不摂生な生活をしているという自覚はあったが、仕事が忙しいと顧みなかった。

お陰で80キロを超える巨漢になった。

身長が高ければまだ良かったが、残念なことに俺の身長は160cmだ。

明らかに俺の分類はデブだろう。

後悔後に立たず。

現在の俺は会社と自宅の間を毎日歩いて往復している訳だ。

家に帰ったらゼロの使い魔のDVDでも見るかな。

楽しいことを考えないと自宅への道のりがとてつもなく遠く感じてしまう。

俺がゼロの使い魔のDVDのことを考えながら家路を急いでいると雨が降り出してきた。

「う、最悪だ。今日の天気は晴れだったはずだろ」

予告なしの雨にうんざりしながら俺は駆け足になった。

現在居るこの場所から家まで5キロ以上ある。

俺の今の行動は意味が無い。

家に辿り着く頃には濡れ豚のできあがりだ。

バスに乗るにしてもバス亭まで1キロ位先にある。

うっ、恨めしいことに目の前をバスが通り過ぎた。

俺って不幸だな・・・・・・・・。

雨に濡れたくない俺は雨宿りできそうな場所が無いか探しながら走った。

俺は5分程走った。

当然、デブの俺はバテた。

「ゼエ・・・ゼエ、ゼエ。きつ過ぎる。俺、体力無さ過ぎだろ」

膝がガクガクしてつらい。

これぐらいでバテるなんて俺ってやばくない。

「俺がなんでこんな目に遭わなきゃいけないんだ」

俺は自分の体力の無さに愚痴を吐いた。

周囲を見ると目の前にいつも通るトンネルが見えた。

俺は雨に濡れながらトンネルへ走った。

「せっかく雨宿り出来たが無駄になったな。背広がびしょ濡れじゃんか。最悪だ・・・・・・・・」

俺は濡れた背広を見ながら毒突いたが、じっとしていても気持ち悪いただけなので、気持ちを切り替えここで雨宿りをせず帰ることにした。

早く風呂に入りたい。

俺はトンネルを抜けようと歩き始めた。

「トンネルの出口が遠くないか？」

俺は誰もいないトンネル内で自分自身に問いかけた。

「疲れている上に雨に濡れたから力がでないのかな」

確かに体が妙に重い。

なんなんだよ！

風邪でも引いちまったのか。

最悪だ……。

俺はブツブツと文句を口にしながらトンネルの出口に向かった。

出口を出ようとしたら、いきなり視覚を失うような光が前面に広がった。

「うっ！」

俺は咄嗟のことに目を瞑った。

目を瞑っても視界が真っ赤だったので暫く目を瞑ったまま立ち尽くした。

「これ何なんだよ！」

今日は本当に最悪だ。

しばらくすると光が収まったような気がした。

睨み越したが先ほどより光が落ち着いている気がする。

何か鳥の声が聞こえるのが気になる。

今、夜だよな。

俺は恐る恐る目を開いた。

「な、なんだ………。ここは」

目の前には西欧の庭園のような場所が当たり一面に広がっている。

数百メートル位先に巨大な屋敷が立っている。

おいおい、冗談だろ。

何なんだよここは………。

「ロベール坊ちゃん！ここにいらしたのですか。心配させないでください」

人の声がしたので振り向くと、いきなり声の人物に抱きかかえられた。

俺は動揺して、頭の中がパニックになった。

「ロベール坊ちゃま。何なんですか？この変な服……。。ダブダブじゃないですか。それに濡れていますよ」

声の主は俺のことをロベールと呼びながら、俺の顔と服を交互に見た。

声の主は女だった。

格好はメイド服だと思う。

抱きかかえられているので彼女の全身は見えないので俺の想像だ。

80キロの俺をどうして、こんな女の子が持ち上げることができるんだ。

それ以前にロベールってなんだ。

俺は久留米正一郎、26歳だ。

断じて、坊ちゃまと呼ばれるような年齢じゃないぞ。

何か目線の高さが変じゃないか？

俺は彼女に腰から抱きかかえられているのに、彼女との目線が異様に近い気がする。

背が縮んだわけじゃあるまいし……。。

「お、おい、俺の手が見えない……………」

俺は動揺しながら自分の手を何気なく見て驚いた。

俺の背広が大きすぎて手が見えない。

「は……………はは……………」

「ロベール坊ちやま。こんな大きな服を来たら手が見えないのは当たり前ですよ。リラのことをからかってらっしゃるんですか？それより、こんな濡れた変な服さっさと着替えますよ。早く着替えないと風邪を引いてしまいます」

リラと名乗った女は私にむっとした表情を一瞬し一言抗議すると、私を抱いたままあの巨大な屋敷に向かって歩きだした。

俺は訳が分からずにいた。

「はは……………。ここは何処？俺は誰？」

「また恍けて、ロベール坊ちやまじゃないですか」

俺ってロベール？

俺の頭の中は完全に混乱していた。

第1話 状況確認

俺はあの後、リラに巨大な屋敷の中に連れていかれた。

彼女は屋敷内の一室で濡れた俺の背広を脱がし、俺に別の服を着替えさせた。

その間の俺は彼女にされるがままだった。

頭の中は混乱していたし、状況がまるつきりつかめないのだから仕方がないと思う。

俺はあれから1週間が経過し少し冷静になることができた。

俺が居るのは自分の部屋だ。

この部屋は呆れる程広い。

部屋の広さは400坪位だ。

日本人の一般人である俺には落ち着かない。

今の生活に戸惑いはあるが、現状を受け入れるしか無いと諦めている。

しかし、俺は何もしなかった訳じゃない。

俺の置かれている状況を自分なりに調べてみた。

殆どがリラからの情報だ。

彼女は俺の専属メイドだそうだ。

俺の年齢は5歳で金髪碧眼の幼児である。

幼児なので将来のことはわからないが、容姿は美形の部類に入ると
思う。

俺の立場はブリタニア王国の皇太子であり、ノルデ公爵家の長子だ。

王族なのに公爵家の長子である理由はノルデ公爵家がトリステイン
王国の貴族でもあるからだ。

3000年位前にノルデ公爵家の7代目当主グロム二世がトリステ
イン王国の北側に位置するブリタニア王国を滅ぼした。

ブリタニア王国は周囲を海に囲まれた大陸を支配していた国だ。

グロム二世は滅ぼしたこの国の王に即位した。

この即位にハルケギニア中の列国が猛烈に抗議してきた。

グロム二世はこの抗議を予想していたらしく、いずれハルケギニア
の列国が武力で自分を討伐しにくると見越し、ノルデ公爵領を捨て
て、ブリタニア王国に一族全員で移動した。

こんな真似が出来たのはノルデ公爵家の出自にある。

ノルデ公爵家は元々海賊だ。

ノルデ公爵家の先祖はトリステイン王国の沿岸部の街を中心に暴れ回っていた。

彼らに手を焼いていたトリステイン国王は領地と爵位を与え、自分の末娘を嫁に出すことでその行為を止めさせた。

これがノルデ公爵家のはじまりだ。

グロム二世はノルデ公爵領を捨てることを決断したが、簡単に決断した訳ではない。

グロム二世が領土を捨てた理由は、ノルデ公爵領で列国と相対すると平地での野戦となり数の暴力で袋叩きにされ勝ち目がない思っただようた。

その点、ブリタニア王国は海に囲まれどうしても大軍を率いるのは難しい。

ノルデ公爵軍は操船技術に長けているので、海上での戦いの方が利が多かった。

戦略的観点からグロム二世は領土を捨てることにしたということだ。

貴族は名誉を重んずるが、グロム二世は名誉より実を取ることにしたのだ。

グロム二世達が移動を終えた頃、ハルケギニアの列国が大軍勢を率いてブリタニア王国を襲撃してきた。

ノルデ公爵軍はブリタニアが海に囲まれている地の利を利用して、海上でゲリラ戦を行いその軍勢の渡海作戦をことごとく邪魔した。

それ以外にも彼らは列国の兵糧を焼き尽くす、派兵で手薄になっっている列国の海岸部にある都市を散発的に襲撃するなど徹底的にゲリラ線を行った。

その結果、列国側は自国と遠征軍内部の両方に厭戦ムード立ちこめブリタニア王国への侵攻を諦めざる終えない状況になった。

列国はブリタニア王国に対し和睦の使者を立てきたが、グロム二世はこの使者を殺害し強行な態度に出た。

使者を殺害したことに激昂した列国側は大規模な渡海作戦を仕掛けて来た。

この行動が列国にとって裏目に出る事になる。

列国の軍はノルデ公爵軍によるゲリラ線により兵の士気が酷い状況にあった。

その上、列国の船団が一斉に渡海を開始したことで、密集した状態になりノルデ公爵軍にしてみれば良い的であった。

士気十分のノルデ公爵軍は大量に用意した火薬を何隻かの舟に乗せ、それを列国の船団目掛けて突っ込ませた。

密集していた列国の船団は避けること敵わず直撃し、次々に大爆発をお越し海の藻屑となる。

大爆発で動揺している列国の船団は敵ではなかった。

ノルデ公爵軍は列国の船を各個沈めていった。

この勝利を機にノルデ公爵軍は大陸に攻め入り、戦争前に手放したノルデ公爵領を奪還することに成功した。

グロム二世はノルデ公爵領から南下し、トリステイン王国王都を包囲しトリステイン国王に次の要求を飲ませた。

1つ、ノルデ公爵家の当主がブリタニア王国の国王になることを他国に先駆けて承認すること。

2つ、他国に対しノルデ公爵家の当主がブリタニア王国の国王になることを承認するように尽力すること。

3つ、ノルデ公爵家の領土は今まで通り領有を認めること。

4つ、ノルデ公爵家の政治・外交・軍事はトリステイン王国の許可を必要としない。

5つ、トリステイン王国はいかなる賦役もノルデ公爵家に課してはならない。

ノルデ公爵家はトリステイン王国の貴族であるが、名実共にブリタニア王国の王族になった。

ガリア王国、アルビオン王国もノルデ公爵軍の予想以上の精強さに、渋々ながらブリタニア王国の王位就任を認めた。

これ以来、ノルデ公爵家とトリステイン王国との仲は険悪になった。
ブリタニア王国とノルデ公爵領の国策は重商主義に重きを置いている。

また、海運業も盛んだ。

海賊仕込みの操船技術でロバ・アル・カイリエまでの海路を切り開き巨万の富をブリタニア王家にもたらしめている。

それらで得た潤沢な資金を利用し、王家は教育・軍事・農業に力をいれている。

この国はハルケギニアの国には珍しく平民の地位は酷くないらしい。
トリステイン王国では平民の地位は家畜と変わらないらしく、ノルデ公爵領への亡命者が後を立たないらしい。

俺は今までの話をリラから聞いたとき、聞き覚えのある言葉を幾つか耳にした。

1つ目は、ハルケギニア。

2つ目は、トリステイン王国。

3つ目は、ガリア王国とアルビオン王国。

ゼロの使い魔の世界に出ている用語じゃないか。

俺は試しにヴァリエール公爵を知っているかと聞いてみた。

リラは俺を変な目で見ていたが優しく教えてくれた。

ノルデ公爵領の東側にヴァリエール公爵の領地があることが分かった。

ツエルプストー辺境伯のことも聞いた。

ヴァリエール公爵の領地の更に東側が領地だと分かった。

それから魔法のこともリラに聞いた。

「来年、杖と契約できますよ」

と、リラは俺に教えてくれた。

確信は持てないがこの世界はゼロの使い魔の世界のような気がする。

しかし、なんで俺はこんなファンタジーの世界に迷いこんだんだ。

胡蝶の夢みたいだ。

俺はあのトンネルで車に引かれ植物状態になり夢を見ているんじゃないかと思うことがある。

だが、今の段階ではそうだと断言できないし、それを受け入れる勇氣は俺にはない。

だから、その可能性は考えないことにしていた。

少なくとも腹は減るし、眠たくなる。

生きていることには違いない。

そう思いたいのかもしれないが……。

こんなことを考えるだけ無駄じゃないかなと思う。

そもそも俺がこんな幼児に変身していることに違和感を抱いている。

置かれている状況を納得はできないが、納得するしかない。

俺は幼児だから調べるにも限界がある。

どういう訳か喋るのは問題ないみたいだ。

原作の才人は使い魔契約をするまで、この世界の言葉が分からなかったはずだ。

わからないことが多過ぎる。

手始めに文字を勉強した方が良いかな。

文字が分かれば本から情報を得ることができる。

俺の家は王族で、公爵家なんだから蔵書は沢山あるはずだ。

第2話 俺の家庭教師

俺はリラに文字を教わるためにリラを探した。

「ロベール坊ちゃま。何か御用でしょうか？」

自分の部屋を出ると何処に隠れていたのかリラが現れた。

リラを今まで冷静に見る機会がなかった。

俺の境遇で冷静な方が異常だと思うが……。

リラは歳の頃は11歳位、身長は140cm位、髪は赤毛で左右を長い三つ編みをしている可愛い少女だ。

彼女の印象は面倒見が良く優しい子だと思う。

こんな歳で立派に働いていることに關心してしまう。

日本ではないことだ。

「リラ、文字の勉強をしたいので教えてくれ」

この世界の文字を習う位ならリラでもできると思った。

「ジュール先生をお呼びしますね」

「リラが教えてくれるんじゃないのか？」

リラの予想外の言葉に不思議に思った。

身分違うからとか言わないだろうな。

「ご冗談を言わないでください。文字の読めない私がロベール坊ちやまにお教えできる訳ありません」

リラが俺に文字を教えることができない理由が文字を読めないことだと知りショックを受けた。

中世ヨーロッパの識字率は低かったらしいから、この世界はそのレベルということのようだ。

リラは勉強はしたくないのだろうか？

そのことを考えて直ぐに暗い気持ちになった。

こんな歳で奉公出る子が勉強できる環境を得るなど無理だ。

つくづく俺が住んでいた日本は恵まれている思う。

「リラわかった。ジュール先生って誰だ」

俺はリラに自分の気持ちを悟らせないように話を続けた。

「ロベール坊ちやま。ご自分の家庭教師のことをお忘れになったんですか？ロベール坊ちやまが勉強を嫌がって、屋敷の離れに閉じ込めた先生的ことです」

リラが平然と恐ろしいことを言った気がする。

ロベールは勉強が嫌で自分の家庭教師を部屋に閉じ込めたそうだ。

俺の知らないローベルはかなり滅茶苦茶な人物だったようだ。

こんな幼児の言葉一つで家庭教師を軟禁するなんておかしい。

考えるだけ疲れそうなので、ここは考えないことにしておこう。

多分、俺はその家庭教師に恨まれているに違いない。

ロベールの野郎面倒事を押し付けやがってと、俺は自分が知らないロベールに毒突いた。

「リラ、ジュール先生を早く呼んでくれ。悪いことをしたようだから、くれぐれも丁重にな」

「はい、ジュール先生を直ぐにお呼びしますね。ロベール坊ちゃんも勉強をやる気になって下さって、リラは嬉しいです」

リラは私に太陽の様な温かな微笑みを返した。

美少女の笑顔は眼福ものだな。

リラはジュール先生を呼びにそそくさと去っていった。

俺は自分の部屋で件の家庭教師を待つことにしよう。

俺の所為ではないが、家庭教師には一言謝るべきかな？

今後、俺の勉強を見てもらう訳だから良好な関係を築くに超したことはない。

ところでロベールの父さんと母さんを見ていないがどこにいるんだ。

後で、リラにでも聞けばいい。

「ロベール坊ちゃま。ジュール先生をお連れしました」

「リラ、ご苦勞様。悪いがお茶を入れてくれ」

「かしこまりました。ロベール坊ちゃま」

リラは一礼すると俺の部屋を後にした。

この部屋には俺とジュール先生の2人だけだ。

ジュール先生は俺を見ながらオドオドしている。

ここまで怖がれることはロベールの奴は余程のことをしたのか？

「ジュール先生、立ったままでは勉強はできません。席に座りませんか？」

俺は対応方法に一瞬悩んだが、俺の身分が偉くても相手は先生なので敬意を持って接することにした。

「は、はい！」

ジュール先生は一言返事をして、俺が勧めた席に座った。

続いて、俺も席に座った。

「ジュール先生には迷惑をかけました。これからは真面目に勉強をしようと思います」

着座した俺は直ぐにロベールの所行を詫びた。

やったのは俺ではないが仕方ない。

これでジュール先生との関係が円滑になるなら良いと思った。

円滑になるかは疑問が残るが……。

「あ、あのロベール様？私は家庭教師を続けてもよろしいのでしょうか？」

ジュール先生は及び腰に私に尋ねてきた。

あれ？

この先生はロベールが軟禁していたことに怒っていないのか？

「続けるも何もあなたに辞められては困ります。今後ともよろしく願います」

「は、はい、頑張ります！」

ジュール先生は涙を流して泣いていた。

彼の年齢は30歳位、身長は180cm位、髪の色は茶色で顔の血色はあまり良くない。

白衣を着て研究室に籠ってそんな雰囲気醸し出している。

彼の本心は分からないが、悪人ではないと思う。

「それでは文字を教えて貰えないでしょうか？」

「文字の勉強ですね。3ヶ月位前に勉強した以来ですし、復習を兼ねて勧めさせていただきます」

「恥ずかしい話ですが全て忘れました。初めからお願いします」

俺はこの世界の文字を全く読めないし、書けない。

俺は幼児なんだから恥もないだろう。

3ヶ月位前に勉強していたのは、ローベルであって俺ではない。

ジュール先生に言ってやりたいが止めておく。

余計なことと言わないに限る。

「はい、わかりました。それでは初めからはじめましょう」

彼は別に気にするでもなく授業を勧めてくれた。

第3話 妖精さん現る

俺は屋敷の庭を散歩している。

本当に広いなこの屋敷は……。

ジュール先生の授業を受け始めて、数日もしないうちに両親とあった。

俺にとっては初対面なので凄く緊張した。

一番心配だったのは俺がロベールじゃないとバレることだ。

それも杞憂に終わった。

結果からいうとバレていないと思う。

流石に俺はロベールじゃないけどわからないですか？

と、確認するわけにもいかない。

両親の雰囲気から察してバレていないと思ったただけだ。

両親にあった感想なんだが、2人とも金髪碧眼のイケメンと美女だ。

父親の名前はアルフレッド、魔法のランクは水と風のスクウェアだ。

母親の名前はマーガレット、魔法のランクは土のスクウェアだ。

天は二物を与えないという言葉があるが、彼らには二物を与えたと思う。

彼らを見ると俺の容姿が美形なのは頷ける。

彼らと会う機会がなかった理由は外遊だったそうだ。

国王夫妻となると忙しいんだなと思った。

久しぶりの両親との再会は彼らの熱い抱擁から始まった。

彼らは親バカだと思う。

欲しいものはないか、困っていることはないか、気に入らない人物が屋敷にいないかと俺に機関銃トークのように話してきた。

彼らの話を聞いている俺が疲労感が堪ってくる。

俺の両親と会うことで新しい情報を得ることができた。

馬鹿でかいと思っていた俺が住んでいる屋敷は俺個人の屋敷だ。

この屋敷はブリタニア王国の王宮の敷地内にある。

それを聞いたとき俺は驚愕した。

俺はこの屋敷の端をまだ見ていない。

そう考えるとこの国の王宮の広さはどれだけ広いのかと思った。

両親との熱烈な出会いを体験した俺は庭園の東にある大木を背にして寝そべっている。

ジュール先生は思ったより優秀だ。

お陰でこの世界の記号のような文字を少しずつだが理解してきた。

絵本を読めないレベルなので偉そうに風潮はできない。

なんか情けなくなってきた。

26歳で絵本を読めないなんて…………。

涙が溢れてくる。

早く絵本を一人で読めるようになりたい。

美女な母親が私に膝に乗せて本を読み聞かせるので精神的に毒だ。

俺は空を眺めて黄昏れていた。

「誰か助けてください！誰か—————」

俺の寝そべっている木の上から人の声が聞こえた。

木の上を見ると人形が叫んでいる。

とうとう幻覚を見るようになったのかと、頭を左右に振ってもう一度同じ場所を見た。

まだ、人形はいる。

「人形が喋っている……………」

俺はあまりの驚きで思った事を声に出した。

すると人形は私に視線を会わせた。

目が合った。

「あのく、つかぬことを聞きますが、私を見えていますか？」

人形は俺に話しかけてきた。

「見えるけど……………」

「え……………。私のことが見えるんですか？そ、そんなことつて……………。ああ！あなたにお願いがあります。私を助けてください」

人形が俺に助けを求めてきた。

人形は木の枝に引っかかっている。

枝まで4メートル位あり俺の身長では無理だ。

そろそろジュール先生の授業の時間が近いから、リラが俺を探しにくると思うので、リラに頼むことに決めた。

「リラ、あそこの枝に引っかかっている人形を取ってくれ」

俺は人形を指差した。

「ロベール坊ちゃま、人形なんてありません」

リラは俺が指差す先を見て言いました。

おいおい、あれが見えないのか？

俺の目には確かに見えるぞ。

「リラ、俺をからかっているのか？あそこに人形がいるだろ」

「からかっているのはロベール坊ちゃまじゃないんですか？人形なんて枝に引っかかていないです」

リラはムスと頬を膨らませて怒っている。

その表情を可愛いなと思ったのは秘密だ。

納得いかないがあの人形は俺にしか見えないようだ。

俺は病気かな・・・。。。

冷静に考えたら喋る人形なんてホラーじゃあるまいし、現実にあるわけない。

「リラ、今日は体の調子が悪いみたいだ。ジュール先生にはそう伝えてくれないか？」

「ロベール坊ちゃま、さぼりたいのならそう言うてください。私はロベール坊ちゃまの味方です」

リラはエツヘンと無い胸を張っているのを俺はスルーした。

俺はそろどころじゃない。

幻覚の症状なんて危ない人確定だ。

「待って下さい！本当をお願いします。助けて下さい！何でもしますから！」

木の上方から人形が叫んでいる。

五月蠅い！

五月蠅い！

これは幻聴じゃないのではないか？

幻聴はこうも臨機応変なものなのか？

ああ！

何が何だかよくわからないが、声の主を助ければ少しは理由がわかる。

俺は人形を助けることにした。

「リラ、庭師を呼んでくれ。俺の指を指した当たりの枝を伐ってくれ」

俺はリラに再度人形が引つかかっている枝を指差し伐るように頼んだ。

「何だかわかませんが、あそこの枝を伐ればいいのですね。わかりました。直ぐに庭師を呼んでまいります」

リラは一礼しそそくさと屋敷の方に向かった。

「おい！お前は何者だ！助けてやるんだから何者が名乗れ」

俺は人形に大声で言った。

「あの……………ありがとうございます。私は闇の妖精、ベティです」

ベティは俺に木の上から起用にペコリと頭を下げた。

闇の妖精？

この世界の魔法の系統は地・水・火・風・虚無だから、その系統の妖精しかいないんじゃないのか？

「闇の妖精って嘘じゃないのか？」

俺は胡散臭いものを見る目でベティを見た。

「嘘じゃないです。信じて下さい。私は正真正銘の闇の妖精です」

瞳をウルウルさせ俺に懇願してきた。

「魔法の系統は地・水・火・風・虚無のはずだ。それ以外の系統の妖精がいるわけない」

「人間さんがそう思っているだけです。この世界にはあなたが言った他に光・闇・空の系統があります」

「マジか？」

「マジです」

ベティは真剣な顔で俺を見つめた。

「ロベール坊ちゃま、何故、木の上を見て独り言を言ってるんですか？危ない人みたいに見えるから止めた方がいいですよ」

ベティとの会話に熱中して、リラと庭師がいることに気づかなかった。

「いつからそこにいたんだ」

「えっと、魔法の系統がどうのここのあたりからですけど……」

・
」

殆ど聞いていないようだ。

さっさとあの人形を助けることにした。

庭師は慣れた手つきで木をあつという間に昇った。

餅は餅屋に任せろというが正にそうだな。

「ロベール坊ちゃま、危ないですからそこから離れてください」

庭師は俺に今立っている位置から離れるように指示してきた。

ベティのことが気になるが仕方がない。

庭師は俺が離れるのを確認するとベティが引つかかっている枝を切り落とした。

枝と一緒にベティも地面に着地した。

落ちた枝に近寄るとベティが目をクルクル回して気絶していた。

俺はベティを丁寧な両手で抱えた。

リラと庭師は俺の行動を変人を見る目で見たが、俺と視線が合うと視線を反らした。

俺はこのままだと変な人を通り越して、頭の才力しい人として認定されるかもしれない。

第4話 ロベールと闇の精霊

俺は闇の妖精と名乗るベティを手で抱えて自室に戻った。

彼女は未だ気絶している。

彼女をどこかに寝かせようと思ったが、体が小さいのでどこに寝かせればいいのか迷った。

仕方ないので俺のベットに寝かせることにした。

その光景を見て人形を寝かせているように感じた。

女の子のようで誰かに見られたらと考えると恥ずかしく思った。

今の俺の心境はマジックミラーのトイレの中で用を足す心境だ。

リラと庭師はベティを見えなかったから、その心配はないと思うが、どうも気持ちが落ち着かない。

俺は気持ちを無理に切り替え、気絶しているベティを観察した。

彼女の外見は身長30cm位、服装は闇の精霊を名乗るだけあって黒一色で統一されている。

髪は綺麗な銀髪、髪型はウェーブヘアだ。

髪を少し触ってみたがサラサラで触り心地がいい。

背中に8枚の羽がある。

羽の形は鳥の羽っぽい。

天使みたいだ。

ただ、鳥の羽との違い、ベティの羽は透き通っていて綺麗だ。

俺はその羽をジッと観察した。

俺が顔を近づけてベティを観察していると、彼女が気づいたようだ。

「め、目が覚めたみたいだな。き、気分はどうだ？」

いきなり彼女が目を覚ましたため、俺は動揺したが平静を装い声をかけた。

「わ、私に何をしてたんですか？」

ベティは何故か涙目で俺を見る。

「な、何のことだ。意味がわからない」

俺が観察していたので怒っているのか？

「人間さん……。そ、その動揺は何なんですか？もしかして……わ、私、もうお嫁にいけない！」

ベティは泣き出した。

「れ、冷静になれ。断言する！俺はお前が嫁に行けないようなことはしていない！」

嫁にいけないようなことはしていない。

髪を触ったり・・・・・・・・。。

服を観察したり・・・・・・・・。。

羽を観察したり・・・・・・・・。。

自問自答して思ったが、これって俺の世界では犯罪じゃないか！

彼女でもないのにこれってやばい。

こ、これはセーフだよな？

俺は自分に言い聞かせる。

そもそも妖精は結婚するのか？

「人間さん、なんで考え事をしているのですか？や、やっぱり・・・」

ベティがまた瞳に涙を貯めている。

「ち、違う。何もしていない。俺は無実だ！・・・・・・・・いや、実はお前の髪を触って服や羽を観察していた。そ、それ以外何もしていない」

俺は初め全面否定しようとしたが、俺は根が正直な性分的なため本当のことを話してしまった。

「や、やっぱりしているんじゃないですか！でもその位なら許してあげます」

「本当か？」

「本当です。あなたに聞く前からこの部屋にいる精霊さんから教えて貰っています」

ベティは今なんて言った。

俺が彼女にした行為はバレている。

この点は一先ず置いておく。

それより重要なことがある。

彼女はこの部屋にいる精霊に教えて貰ったといっていた。

俺は周囲を見回した。

この部屋にベティ以外の精霊がいるのか？

何もいない。

「あれ？見えないんですか？私を見えるのに変です。あなたの周りには沢山の精霊さんがいますよ。地・水・火・風の四精霊全てがいます。人間さんの癖に凄いです」

「精霊が周りにいると言われても実感が湧かないんだが……」

俺はベティに率直にいった。

「私は精霊の中でも王族級の精霊なのです。絶対に人には見えないです。あの極悪人のブリミルにすら視覚できない存在です。それを見ることが出来るあなたが私の配下精霊の姿を見えないなんてありえないです。もしかして私のことをからかっています？」

ベティは自己紹介を簡単に説明した後、俺がこの部屋にいる精霊を見えないことを訝しんでいる。

「俺は本当のことをいっている。そんなものが部屋の中にいたら夜寝れないだろが！」

「精霊さん達になんてこというんですか！精霊さん達、悲しんでいます。精霊さん達に謝ってください！」

ベティが凄く怒っています。

「すいませんでした」

俺はよくわからないが謝ることにした。

「次からは言葉を選んで下さいね」

「気をつけます」

「ロベールさん、あなたは何者ですか？少なくともこの世界の人間ではないですね」

ベティが真剣な表情になって俺に聞いてきた。

「俺の名前をどうして知っているんだ……。もしかして、それもこの部屋にいる精霊に聞いたのか？」

「もちろんです！」

ベティはニツコリと可愛い笑顔を向けてきた。

対照的に俺は恐怖した。

俺のプライバシーはどうなっているんだ……。

「お、俺は……。」

彼女に正直にいいのか？

まあ、人間には見えないようだし、俺の知り合いに漏れることはないだろ。

それに秘密を抱えるのにも正直疲れる。

誰かに話したくても誰にも話せないでいる。

彼女なら精霊だし人間社会とは無関係なので話しやすい気がする。

俺は彼女に今までの経緯を話すことにした。

「そういう訳なんだ・・・・・・・・」

「ロベールさん、いままでご苦労なさったんですね」

ベティを腕を組みウンウンと感慨に耽っている。

「この世界での生活は1週間位だがな」

「それでもご苦労なさっていると思います。やっぱり、ご自分の家に帰りたいですね」

「まあ、帰りたいけど、この姿は不味いだろ。多分、俺の家族は俺だと気づかないと思う」

「そうでしょうね。諦めてこの世界に永住するしかないですよ」

ベティは可愛い笑顔を向けて来た。

彼女に俺の境遇を話して少し気が楽になった。

「俺もそう思っている。お前のお陰で気が楽になったよ。ありがとう」

「どういたしまして。それと私のことはベティと呼んでください。お前と呼ばれるのは嫌いです」

「悪かった。これからはベティと呼ぶよ」

俺はさっき彼女との会話の中で気になったことについて質問した。

「ベティ、質問してもいいか？」

「何です？私に分かることなら教えてあげます」

「さっき、ベティは『あの極悪人のブリミル』と話していたけど、その『ブリミル』はこの世界の人間に神とあがめられている人間のことだよな」

俺がブリミルの話をするベティは明らかに不快を覚えたような表情になった。

「その名前を聞くだけで不愉快です！あの極悪人は恩を仇で返すような人間です。わかりました。私がブリメル of 全について話してあげます」

ベティは怒り心頭で誰かに言わないと気が済まない様子だ。

第5話 プリミルの大罪 前編

俺はベティにプリミルを極悪人と呼ぶ理由を聞くことにした。

「ロベールさん、この世界についてどの位知っていますか？」

「・・・・・・・・俺の知識と大分誤差があるけど、俺はこの世界のことを知っているはずと思う。多分・・・・・・・・この世界の未来についても・・・・・・・・」

「それはどういう意味ですか？」

ベティは俺に話を促した。

「俺のいた世界にはこの世界に似た世界を舞台にした物語があるんだ」

俺はこの世界がゼロの使い魔の世界に似ていると分かり半信半疑だった。

ベティからプリミルの名を聞き更にこの世界がゼロの使い魔の世界ではないかと思った。

「冗談を言っている訳ではないみたいですね・・・・・・・・」

ベティは俺の表情を見て、自分に言い聞かせるように呟いた。

「ロベールさんの話のことは後にしましょう。あなたが平民並みの知識があることを前提に話します」

「それでいい。分からないことがあれば質問する」

ベティは俺の言葉に頷いた。

「ブリミルの話をする前にこの世界の精霊について話をします。この世界は空の精霊を頂点に、光・闇、虚無、地・水・火・風の順で力関係があります。人間の世界に例えるなら、神、王族、貴族、平民です。特に、この世界の創造主である空の精霊の力は絶大です。私が属する闇の精霊も空の精霊に劣りますが、虚無と地・水・火・風の精霊を全てを一度に敵に回しても叩き潰すだけの力があります。空・光・闇の三精霊は他の精霊と別格です」

俺は精霊の世界にも身分制度があるのかと思った。

「念のために言うておきます。精霊は人間のように下位の存在を搾取や従属を強要することはありません。私達は人間のように欲望は強くありません。他の精霊に対し一切干渉しません。その点をブリミルにつけ込まれたのです」

ベティは拳を強く握り締め怒っていた。

「ブリミルは精霊に呪いをかけたのです」

「呪い？」

俺は聞き返してしまった。

ゼロの使い魔の小説、アニメの内容を知っているけど初めて聞く話だ。

「ロベールさん、もともと人間は素養と機会があれば血筋に関係なく魔法を使えたのです。素養とは精霊を見る能力です。機会とは精霊と対等な契約を交わすことです。ブリミルは仕組みを破壊しました。その結果、精霊は人間を憎み、魔法はブリミルの血を受け継ぐ者しか使えなくなりました」

「精霊を見る能力は血筋に関係するんじゃないのか？」

精霊を見る能力は誰でも持っていると思えない。

「その能力はもともとこの世界に住む全ての人間に備わっていました。だから人間が魔法を使うことは特別な能力ではないのです」

ベティは驚くべきことを言った。

この世界の魔法は人間にとって一般的な力だった。

それがどうして王族や貴族の証みたいになっただんだ。

「貴族が魔法を使えるのはどうしてなんだ。ブリミルの血を受け継ぐのは王家の者だけじゃないのか？」

俺はトリスティン王国などの王族だけがブリミルの血を引いていると思っていた。

「それは違います。この世界で魔法を使えるということはブリミルの血を引く証です。ブリミルがかけた呪いは『我が血に従属せよ』です。王家の者は他者よりブリミルの血が濃いだけです。彼ら王家の者は古き時代に近親間の婚姻を繰り返しました。最近ではその傾

向はなくなりましたが、全くないという訳ではないです」

「何故、ブリミルはそんな呪いを精霊にかけたんだ？」

ブリミルは力が欲しかったのか？

俺は遠からずだと思った。

この世界の王族・貴族の所行は目に余る者がある。

特にトリステインはその最たるものだと思う。

ブリミルの子孫である王族・貴族を見る限り、ブリミルが欲望に忠実に歪んだ人間だったと言われても信じてしまう。

「ブリミルはこの世界の人間ではありません。彼はあなたと同じ境遇の者です。ロベールさんとの違いは、彼が魔法について精通していた点です」

「ブリミルは魔法が存在する世界の人間だったのか？」

「彼の世界で魔法は錬金術と呼ばれていたそうです。彼はエルフの村に身を寄せていました。その村は行き場の無い彼を暖かく迎えしました」

ベティは記憶を思い出すように目を瞑っていました。

「ブリミルがなんでエルフの村に住んでいたんだ？」

俺はその事実に驚いた。

このハルケギニアではエルフと人間は対立関係にある。

人間がエルフの村に住むなんてあり得ないと思った。

「今はあり得ない話ですが、5、000年前はエルフと人間の関係は良好でした。ブリミルは最悪な関係にした張本人です」

ベティの話を聞くに連れブリミルは諸悪の根源のように感じた。

「彼はエルフの村でこの世界に魔法が存在することを知りました。彼が契約したのは水の精霊です。しかし、彼はそれだけでは飽き足りませんでした。更なる高みを求め日夜魔法の研究に勤しんでいました。彼は錬金術の知識とこの世界の魔法を組み合わせ、さつき話した呪いを編み出しました。その一番最初の犠牲になったのは彼の契約精霊である水の精霊です。元来、水の精霊は純粹で温和な性格です。契約を交わした彼のことを親友と思っていました。その想いにつけ込んで忌まわしい呪いをかけました。この呪いの恐ろしいところは呪いをかけた属性の精霊全てに伝染することです。水の精霊を傘下に置いた彼は村を逃げるように出て行きました。このとき彼に同行したのが恋人であり、後のガンダールプであるエルフの女性です」

彼女の話は驚愕の内容でした。

水の精霊全てを呪いをかけて従属させた。

ブリミルを危険な人物と思った。

この世界の魔法の背景にこんな酷い話があるとは夢にも思わなかつ

た。

ゼロの使い魔のアニメを楽しんで見ていたのにその気持ちを裏切られた気分だ。

第6話　ブリミルの大罪　中編

「ブリミルは傘下した精霊の力と呪いの力で火、土の精霊を次々に従属させました。風の精霊は抵抗を試みましたが三精霊の力を手中にしているブリミルに抗う術はありませんでした。エルフはこの所行に激怒し彼を殺害するために追っ手を差し向けました。しかし、エルフ達は彼の討ち取ることができませんでした。度重なるエルフの追っ手に悩まされたブリミルは更なる力を手に入れようとします。それが虚無の精霊の力です。虚無の精霊の力は強く呪いをかけれずブリミルは苦心します」

虚無の精霊もブリミルは呪いをかけようとしたのか………。

ブリミルは独裁者みたいな奴だな。

「虚無の精霊の呪いをかけるのに失敗したブリミルは自分一人の力では無理だと考えました。彼が思いついたのは呪いを精霊ではなく、生き物にかけることです。この頃の彼は猜疑心が強く恋人の言葉すら信用しなくなっていました。自分の意のままに従う忠実な奴隷のような存在を欲しました。使い魔契約の成り立ちです。使い魔の付加能力は使い魔の生命力を限界まで使い潰すためです。非情にも彼は恋人に対し使い魔の呪いをかけました」

俺はブリミルへの印象が最悪になった。

いままで聞いた内容だけでも恋人に見捨てられるには十分だと思う。それでもついて来てくれる恋人に呪いをかけるなんて人間性を疑う。

「ブリミルは4名の使い魔を手に入れ虚無の精霊を従属させました。この一件で彼と恋人との間に軋轢が生まれました。虚無の精霊を従属させる為に、使い魔の一人を犠牲にしました。その使い魔は虚無を押さえ込むための人柱として使用したのです。恋人は自分に使い魔の呪いをかけ、命を紙屑のように扱うブリミルを疎むようになったのです。ですが、彼女はブリミルに使い魔の呪いのために抵抗できませんでした」

俺はもう黙ってベティの言葉に耳を傾けていた。

ブリミルの話を聞いているだけで不快な気分になってくる。

ベティの気持ちがよくわかった。

「ブリミルとエルフの確執は抜き差しならないものになります。エルフは一族を総動員して彼を殺害しようとしています。危機を感じたブリミルは言葉巧みに人間達を煽動しました。彼の呪いの影響で人間は魔法を使えなくなっていました。その理由をエルフの所為にしたのです。人間とエルフの間に戦争が起きました」

「ちょっと待ってくれ。呪いの影響はエルフに無かったのか？人間が呪いの影響で魔法を使えなくなったなら、エルフだって一緒だろ」

「エルフは人間とは違います。エルフ達は光の精霊の眷属です。光の精霊の祝福を受けた彼らの住む土地なら絶対的な強さを誇ります。魔法も呪いの影響を受けません。逆に、その土地から一步出れば忌々しいブリミルの呪いの影響で魔法を使うことは難しいかったです」

ベティは不快感を露にした表情をした。

「この戦争は最初エルフが優勢でした。個体数が少なくても戦闘能力で優れ魔法を扱えるエルフ、個体数は多いが戦闘能力はエルフより低く魔法を扱えない人間。いくらブリミルの魔法の力が絶対でも所詮一人です。しかし、戦局は数十年後、徐々に人間が優勢になっていきました。前線にブリミルの血を引く者が現れたのです。人間の中に魔法を扱う者が現れた瞬間でした。次第にブリミルは人間達の絶対者になっていきました。ブリミルは権力に酔いしれ淫蕩に耽るようになりました。この淫蕩に耽っていた時期にブリミルの血を引く子供達が沢山生まれることになります。この子供の中には王族の娘の血を引く子供がおり、現在のハルケギニアの諸王国の血筋の源流です」

ブリミルは聞けば聞くほど最低な人間だな。

自分の身勝手に戦争を引き起こし、自分は放蕩三昧とは……………。

「突如、人間とエルフの戦争は終わり告げます。ブリミルの恋人だったエルフが裏切ったからです。彼女は使い魔の呪いでブリミルを害すことは不可能なはずでした。しかし、彼女はブリミルを殺害することに成功します。彼を失った人間側は動揺し、そこをエルフに急襲され敗北することになります。その後、エルフは自分達の土地に幾重もの強力な結果を張り人間との交流を一切立ちます」

ベティはひと呼吸置いて俺を見つめました。

「これがブリミルを極悪人と呼ぶ理由です」

彼女は俺に短く言った。

「ブリミルが最低の人間というのは分かった。だけど、トリステイン王国はラグドリアン湖の水の精霊と盟約を結んで力を借りていたよな。憎んでいるならなんで、水の精霊はトリステイン王国に強力しているんだ？」

俺は疑問をぶつけることにした。

「それはここ1000年の間のことです。それ以前の関係は最悪でした。人間が努力して少しずつ関係を修繕したみたいです。でも、ここ数年は関係が再びこじれているみたいです。水の精霊だから上手くいっただけです。他の精霊なら話す前に八つ裂きです」

ベティは鼻で笑うようにいった。

「あっ！ロベールさんのことを笑ったわけじゃないですよ。あなたは精霊に凄く愛されています。みんな嬉しそうです」

彼女は俺に笑顔でいった。

第7話 プリミルの大罪 後編

俺はこの世界のことをベティにいろいろと聞いていた。

屋敷の者には聞きづらい内容もあったからだ。

その中で興味深いことを耳にした。

この世界は風の精霊によって危険な状況にあるということだ。

原作の話で出てくる風石の大暴走がその兆候の一つだそうだ。

呪いをかけられている精霊の中で、風の精霊が一番人間のことを憎んでいる。

彼らは呪いを解くために5000年の間ずっと力を蓄えている。

それが大陸の隆起を招くとのことだ。

「風の精霊が呪いを解くことに成功したらどうなるんだ？」

想像つくがベティに聞いてみた。

呪いで魔法を使えたのだから常識的に考えて、人間の使う魔法は使えないはずだ。

でも、風の精霊の呪いが解けるのだから、風の魔法が使えなくなるだけだと思う。

そうじゃない。

四精霊の力を合わせて呪いをかけた虚無の精霊も自動的に解放される気がする。

その結果、虚無の魔法も使えなくなるはずだ。

「この世界の人間の魔法は使えなくなります。王族や貴族はただの人になります」

ベティは俺の予想とは違う答えをいった。

「その顔は風の精霊、虚無の精霊だけが解放されていると思っているようにですね。理屈からいうとそうなのですが……。ブリミルの呪いは5000年の間に限界が来ています。他の精霊も何もしていない訳ではないです。首輪を付けられて喜ぶ者がいる訳がありません。地・水・火の精霊も力を蓄えています。呪いの一角が崩れれば、全ての呪いがなし崩し的に解かれることになります」

ブリミルは本当に極悪人だな。

彼も含め、彼の子孫達は精霊達を呪いという鎖に縛り付け自分のいのように使い続けてきた。

「地上は全部浮上することになるのか？」

俺は風石の暴走がどうなるのか気になった。

原作では最終的にどうなったか分からないのでベティに聞く事にした。

多分、サイトとルイズで上手くやるんだろうが、それだと風の精霊は解放されず他の精霊も呪いの呪縛を受け続けるのではと思った。

俺はベティの話を聞いて精霊達に同情していた。

「全部かどうかはわかりません。風の精霊は呪いを解くまで止めないと思います」

「風の精霊が呪いを解いた段階で宙に浮いている大地は地上に落ちるということだよな。その地に住んでいる人間は死ぬんじゃないのか？」

ベティは呪いが解ければ人間の魔法は使えなくなるといつていた。

ブリミルの所為で関係ない人間まで巻き添えをくうことになる。

王族や貴族が死ぬは勝手に死ぬと思う。

自業自得だと思う。

「はい、沢山の人間が死ぬと思います」

予想通りの回答だな。

「俺はこの世界と関係ないんだぞ」

「私に言われても困ります。元はと言えばブリミルが所為なのです。でも、ブリミルの血筋とは関係ない人達まで巻き込むのは忍びないです」

ベティは悲しい顔をして俺にいった。

「大陸の隆起を阻止して、精霊達の呪いを解く方法はないのか？」

「・・・・・・・・・・。そうですね・・・・・・・・・・。ないことはないのですが・・・・・・・・・・かなり難しいですよ」

ベティは思案した後、難しい顔をして俺にいった。

方法があるのなら聞いて損はないと思った。

聞いた上で判断すればよい。

「その方法を教えてくれないか？」

「どうしてそれを知りたいのですか？」

俺はベティに逆に質問された。

「ロベールさんはこの世界の住人ではないのにどうして知りたいのですか？」

俺はベティに俺の知っている範囲内で今後の未来を話した。

「・・・・・・・・・・。ロベールさん、この話は誰かに話しましたか？」

ベティは恐い顔で俺に聞いてきた。

「いいや、ベティ以外には話していない」

俺は正直にいった。

「懸命な判断と思います。ロベールさんの話では風の精霊は呪いを解くことに失敗するみたいですね」

ベティはしみじみとした表情でいった。

「俺の話を信じてくれるのか？」

「信じています。ロベールさんが四精霊と虚無の精霊のことを同情しているのがわかります。あなたが私に嘘をつくメリットがありません」

ベティはやさしく微笑んだ。

「ロベールさんは虚無の魔法使いとその使い魔によって、風の精霊が呪いを解くのを邪魔すると考えているんですね。他の呪いを解く方法を知りたいといったのはそのためですね」

「ああ、できれば人間も精霊も傷つかない方法をあればと思った」

俺は精霊だけ苦しい思いをするのは間違っていると思った。

「確かにあります。その手段を実行したら、あなたは沢山の人間を敵に回すことになるかもしれないですよ」

ベティはさっきのやさしい表情と打って変わって真剣な表情に変わった。

沢山の人間を敵に回すことになる？

何なんだよ……………。

明らかに危険な臭いがしてきた。

俺には無理だ。

だって、元の世界では普通のサラリーマンなんだぞ。

結局、俺の思いは偽善でしかないんだ。

「そ、そんな危険な方法なのか？俺はそんなつもりで聞いたわけじゃない……………」

情けないがヘタレたことをいった。

「その程度の思いで私に聞いたのですか！」

ベティは凄く怒っていた。

「い、いや、俺は元いた世界では普通の労働者だったから……………」

「だから、何なのですか？」

「・・・・・・・・」

ベティの声が冷たい感じがした。

俺にどうしろっていうんだ。

今の俺はブリタニア王国の皇太子だけど、中身は普通の人なんだぞ。

26年間も普通の人をしてきた俺に大業なんてできるわけないだろ。

良い訳ばかりで情けない。

いつもそうだった。

軋轢を生まないように目立たないように生きてきた。

イジメられている子を見ても見てみぬふりだった。

卑怯者と思っただて勇気がでなかった。

今の俺は権力を持っているのにヘタレ根性だ。

俺が少し勇気を出すだけで、権力を使って何かできるかもしれないのに・・・・・・・・。

・・・・・・・・。

結局、俺は自分が可愛いんだ。

・・・・・・・・。

でも、精霊達を助けてやりたい気持ちは本当だ。

俺が見捨てることで精霊達は呪いから解放されないんだ。

そして後悔するんだ。

いつもそうだった。

もう、そんなのは嫌だ！

後悔するくらいならやってやる！

「ベティ、教えてくれ」

俺はベティの目を見ていった。

「覚悟は出来たようですね。ふふ、わかりました。お話します。方はブリミルの遺産である始祖の円鏡、始祖の祈トウ書、始祖のオルゴール、始祖の香炉を破壊すればいいです。これらの品は強力な固定化の魔法が施されているので通常の方法では破壊できません。破壊方法は私にはわかりません」

ベティは俺の表情を見て満足したのか、一度微笑み話をはじめた。

俺は彼女の話聞いて驚愕した。

精霊を解放するには全ての国を敵に回す必要がある。

王家の秘宝を手に入れる手段なんて正攻法で上手くいくとは思えな

い。

国を滅ぼして奪い取るしかないだろ。

あまりの壮大な話に目眩がしてきた。

「話を聞いて怖じ気づきましたか？当然のことだと思います。でも、このことを聞いた以上、ロベールさんは私の身内です。精霊の力になって貰います。私もあなたと契約を交わし、あなたを支えるつもりです」

ベティは俺に微笑んでいった。

「嫌なんて言わないですよね？この情報は今や人間もエルフも知り得ないことです。もし、精霊に良からぬことを考えている者達に知れたら大事です」

彼女はそいいいながら宙に死神が持っているような大鎌を顕現させた。

彼女の表情は可愛い笑顔だが、宙に浮く大鎌がアンバランスだ。

「精霊も人間も救ってやるよ！」

俺はやけくそになっていった。

第8話 ベティを師匠に仰ぐ（前書き）

更新が遅れすいませんでした。

第8話 ベティを師匠に仰ぐ

ベティと出会い、彼女と契約を交わした。

あれから3年間の年月が過ぎ、俺は8歳になった。

俺が彼女と交わした契約は、この世界の使い魔契約ではない。

精霊と人間の対等な契約だ。

一方に従属するのではなく、共に力を合わせ生きること誓う。

契約を彼女と交わすとき、俺は彼女からカミングアウトを受けた。

「ロベールさん、何を黄昏れているのですか？ 剣の鍛錬は終わって
いません」

俺に声をかけてきた目の前の女性はベティだ。

今の彼女は身長が170cm位の大柄だ。

最初あったときの30cmの身長とは違う。

彼女の容姿は可愛い印象から、大人の美女に変身している。

銀髪と背中8枚の羽が唯一面影を感じる。

それ以外は全くの別人だ。

彼女が俺にカミングアウトした内容だ。

はじめて見た時は驚愕した。

余談だが、彼女の名前と思っていたベティは愛称で、ベアトリスが本名だ。

精霊の世界に名字はない。

俺がベアトリスと呼びなおそうとしたら、今まで通りで構わないと言っていた。

彼女の年齢は20000歳だ。

老人というフレーズを口にしたら殴られた。

俺の精神は大人でも体は子供なので本気で殴るのは止めて欲しい。

彼女は闇の精霊の中では古株で長老の一人だ。

精霊は各々属性ごとに13人の長老がおり、その長老を中心に精霊を管理している。

そんな偉い精霊がなんで俺の屋敷の木の上で枝に引っかかっていたんだ。

俺は彼女にその理由を聞いた。

天気良かったから散歩していて、日向ぼっこをしていたら木に引っかかった、と俺に答えた。

何とも下らない理由だ。

最初に出会った当時の彼女の姿なら、すんなりと受け入れることができた。

しかし、今の姿を見て、受け入れるのは難しい。

考えても無駄だと自分に言い聞かせる。

「い、いつ痛だっ?????!」

俺の頭に鈍い痛みが走った。

「ロベールさん、あなたが悪いですよ」

ベティが俺の目の前まできて、俺の頭を殴りつけたようだ。

何て乱暴な奴なんだ。

この3年、彼女は俺にシゴキという名の拷問を加える。

彼女に言わせれば、傷はすぐ直せるし、死んでもすぐ生き返らせられるから問題ないらしい。

死ぬ俺の身にも成って欲しい。

はつきりいつてシャレにならない。

この3年で10回は彼女に殺されている。

殺される度に魔力が増大している気がするが、正直勘弁してくれ。

俺はもつとやさしく指導して欲しい。

このままでは精神を病みそうだ。

「剣の鍛錬中に考え事するのは駄目です。あなたの魔力の総量はまだまだです。今のままじゃ、闇の精霊魔法を使うのはいつになるかわかりません」

俺は彼女を見上げる。

口調は厳しいが表情から察するに怒ってはいないようだ。

「俺はもとと普通の労働者だったんだ。ベティの鍛錬はきつ過ぎる。もう少し、手を抜いてくれ。このままだと目的を達成する前に廃人になる」

俺はベティに片足に縋りつき、必死に懇願した。

彼女の太ももに縋りついたとき、やわらかいと思ったのことは内緒だ。

バレたら殴られる。

「…………ふう、仕方ないですね…………。この3年、ロベールさんは頑張りました。だから、少し手を抜いてあげます。ほら、立ってください」

「ありがとう！」

ベティの太ももの感触を名残惜しく思いながら、彼女の手を借り立ち上がった。

「いいえ、構いません。でも、ロベールさんが弱いままでは『精霊を解放する』大業を成すのは夢のまた夢です。そのことを肝に命じておいてくださいね」

彼女は厳しい表情で俺にいった。

「分かっている……」

俺は彼女の言葉を頭に反芻する。

ベティが俺を鍛える理由は分かる。

彼女の仲間達を俺に開放して欲しいんだ。

「今日は鍛錬はこれくらいしておきましょう」

彼女はいつものやさしい表情で俺を見ていた。

「悩みごとがあるなら相談にのりますよ。あなたと私は契約を交わす仲です。気にせず何でも言ってくださいね」

ベティは指導以外はすごくやさしく、面倒見がいい。

「悩みごとじゃない。ベティと会って3年になるんだな、と感慨に耽っていたんだ」

俺は隠すことでもないの、彼女に話した。

「そうでしたか……。私はてっきり何もかも嫌になって逃げ出す算段を立てているのかと思いました」

彼女は軽く笑って言った。

「本音はそうしたいけど……。契約した以上無理だろ」

「ロベールさんと私のいずれかが契約を拒否すれば契約はすぐ解除されます。契約は強要ではないのです」

ベティは俺に言った。

「それは何度も聞いた。だいたい、最初のころは俺を力で脅していただくに良く言う。ベティ、安心しろ。もう俺は精霊達のことを無視して生活するのは無理だ」

俺はベティと契約してから精霊を視認できるようになった。

今の俺は光以外の精霊魔法を使用することができる。

これが闇の精霊と契約をするということだ。

虚無と闇の精霊魔法はまだ使用できない。

まだ、俺にはそれらの魔法を行使するだけの魔力がない。

5歳で杖契約をしたが、それ以前に杖なしで魔法を使えた俺には意

味のないものとなった。

杖を使つて魔法を行使すると、精霊が苦しむのが分かるから俺は使わなくなった。

だから、俺はジュール先生に魔法を教わるときは、杖を使う振りをしている。

精霊達はベティと違い人の形をしていない。

精霊の姿を例えるなら光の玉だ。

光の玉の種類は赤、青、黄、緑、灰色、黒、白。

俺の周囲には常に黒い光の玉が漂っている。

これが闇の精霊だ。

赤は火の精霊、青は水の精霊、黄は土の精霊、緑は風の精霊、灰色は虚無の精霊、白は光の精霊。

ベティの様に人形の精霊は高位の精霊だ。

精霊は光の玉だけど、感情がある。

機嫌が良いときは光の玉が柔らかい光を放ち、機嫌が悪いときは強い光を放つ。

全てベティの受け売りだが、そう思って精霊を見ると楽しい。

この世界に来て、心を本当の意味で許せる者がいない俺には精霊達が一番の友達だ。

ベティの存在も俺の中で徐々に大きな存在なってきた。

だから、精霊達を助けたいと思う気持ちに嘘はない。

「ふふ、ロベールさんがやさしい人で良かったです」

ベティは私の顔をうれしそうに見ていました。

第9話 ノルデ公爵位を継ぐ（前書き）

更新が遅れすいませんでした。

第9話 ノルデ公爵位を継ぐ

「父上、私はまだ10歳ですよ。その話は冗談ですよね」

俺は父親から耳を疑う話を聞いた。

俺は10歳でノルデ公爵位を継承することだ。

先月、俺は10歳を迎えたばかりだ。

そんな話は聞いていないぞ。

「冗談ではない。10歳で公爵位に就くのはお前が初めてだが、これは我がブリタニア王家のしきたりだ。ジュールから話を聞いている。お前は年に似合わず聡明だと聞いている。我が国の歴史は知っているだろう」

聡明ねえ……………。

一応、大学が出ているし、中身は俺のいた世界と通算して36歳だから、10歳児の精神とは違うよな。

余談だが俺は闇の精霊魔法を使えるようになっていた。

表向きは火、風のトライアングルだ。

オクタゴンクラスの魔法も操れるがあまり目立つのは面倒だ。

10歳児で火、風のトライアングルでも十分目立つだろうが、拍付

けはある程度必要であると思った。

父親は親バカモードを止め俺を真剣な表情で答えを求めてきた。

「我が国はハルケギニア大陸の国々を敵に回した時期がありました。それは遙か昔のことです、今はしこりはあれど3000年前のようなことは起こらないと思います。絶対にないと言い切れませんが・・・」

3000年前、世界を敵に回して戦争をした。

トリステインとの関係は最悪なままだが、表向き国交は正常化している。

ここ百年ほどでトリステインの国力は弱体化している。

国家財政も破綻寸前だ。

有り体に言えば、財政状況は俺が元いた世界のギリシャの一手手前だ。

国交正常化の立役者はトリステイン宰相マザリーニだ。

15年程前、トリステイン領内が大飢饉に見舞われた。

ただでさえ重税に喘ぐトリステインの民は死を宣告されたに等しい。

案の定、住民は周辺各国に逃亡する事態に陥った。

これを憂慮した彼は金策に走ることになる。

金策は暗礁に乗り上げることになる。

クルデンホルフ大公国からは融資を受けることができた。

しかし、周辺各国は貸し倒れを恐れて融資を拒否した。

そのとき、手を差し伸べたのが我がブリタニア王国だ。

彼は我が国の申し入れを快く受け入れた。

これにトリスティンの貴族は猛反対したが、彼が強引に押し進めたそうだ。

2900年来、国交が途絶えていた両国はこれを機にそれを正常化した。

ガリアとアルビオンとの関係は善くも悪くもない。

ただ、両国ともロマリアの手前、我が国と大手を振っての関係とはいかないみたいだ。

ゲルマニアとの関係は良好だ。

彼の国は新興国ということもあるが、彼の国の立国当初から友好関係を築いていることも大きい。

ロマリアとの関係は最悪だ。

頭の固い坊主共は未だに我が国を始祖縁の国に反逆した者達の国と

罵っている。

我が国の国王が代々、潤沢な資金を背景にロマリアの枢機卿共に金を掴ませているので大事にはなっていない。

金を貰っている相手を罵る根性からしてロマリアは救いようがないと思う。

「ロベール、お前の言うことはもつともだ。しかし、過去に起こったことはまた起こると想定して万全の体制を敷く必要がある。それが為政者たる心構えだ」

父親は3000年前の大戦がまた起こると思っっているようだ。

もしくは、起こる可能性が捨てきれないからの用心だろうか？

今後、俺が大戦の発端を引き金になる可能性はある。

しかし、俺は極力、戦争を起こすつもりはない。

戦争なんて国力を疲弊させ民を苦しめるだけだ。

戦争はしないにこしたことはない。

「父上、仰ることはわかりました。そのことと私がノルデ公爵位を受爵することと何の因果関係があるのですか？10歳児の私には重責ではないでしょうか？」

幼年で公爵位を継ぐのは逆効果じゃないのだろうか？

俺のいた世界でも幼い皇帝が代々続いたことで国家を腐敗させた事例がある。

皇帝と公爵では意味合いは違うが……。

幾ら中身は36歳のオッサンでも、外見は子供だ。

「ノルデ公爵領は我が国にとり、軍事上重要な地だ。もし、他国にノルデ公爵領を奪われる事態になれば、我が国はハルケギニア大陸への足場を失うことになる。周辺各国とは現在、国交は表向きは良好だ。しかし、トリステインとロマリアは油断ならない。我が国のことを陰では未だ良く思っていない。トリステインと縁戚関係にあるアルビオンも同様だ。だからこそ、我らの父祖はノルデ公爵位を国王と皇太子以外受爵できない国法を定めた。そして、代々、皇太子がノルデ公爵領を領国経営可能な能力を身につけた時点で公爵位を譲るようにした。私は18歳だった。お前は歴代皇太子の中では最年少だ。プレッシャーはあるだろうが国のため、民のためと思つて重責に励むのだ」

父親は俺に駆け寄ってくると、俺の両肩を掴み俺の目線で俺を鼓舞するように言った。

親バカな父親が俺にこんな真剣な顔で話するのは初めてのことだ。

冗談ではなく本当に国家行く末を見据えてのことなのだろう。

どうせ俺に拒否権はない。

王都にいてはいろいろと身動きしづらい。

ノルデ公爵になってもそれは同じだろうが、今よりましだと思う。

ベティとの約束を果たすためにもこの申し出は受けるべきだろう。

「わかりました。その申し出慎んで受けます。ですが、お願いがあります」

「願いとはなんだ？申してみよ」

「ジュール先生とリラを同行させてもよろしいでしょうか？」

ジュール先生は一見して頼りなく見えるが、博識だし魔法のランクも水のスクウェアだ。

リラとはこの世界に来て5年の付き合いになるし、気心もしている。

「何だ。そのようなことか。気にしなくてもいい。この屋敷の大半の者はノルデ公爵領の館に移動する」

父親は笑顔で俺に告げた。

俺はまだ見ぬ知らぬ土地に初対面のお供を連れて出向するんじゃないかと思っていた。

俺の取り越し苦労だったようだ。

「ジュールは王家の者に代々仕えている家の者だ。少々、気弱な所があるが真面目で忠誠心の厚い男だ。向こうではお前の力に成ってくれることだろう。しかし、リラのことならいざ知らず、ロベール

がジュールを買っていたとは驚きだな」

父親はジュール先生の授業が嫌で部屋に軟禁していた時期のことを言っているだろう。

あれは正確には俺の仕業ではない。

「父上、ジュール先生の授業は大変勉強になります」

「そうか。それを聞いて安心した。ジュールにはお前の顧問になつてもらうつもりでいた。それを聞いて安心した」

ジュール先生はブリタニア王国でも名家の出身だ。

彼の実家は侯爵家で、その家の三男坊だ。

冷や飯食らいの居候の身分なので、自身で身を立てる必要があつた。

幸いなことに彼は博識で英明だったので、父上にその才を買われ俺の家庭教師を任されたのだ。

「ロベールよ。ノルデ公爵領での生活が落ち着いたら、手紙を寄越すのだぞ。父も母も本音を言えばつらいのだ。それでも王族に生まれた者の宿命と諦めている。私も通った道だ。私も暇があれば顔を出す」

父親は号泣しだした。

親としては10歳で旅立たせるのは胸を裂かれる気持ちなのだろう。

ロベールは本当に愛されていたのだな。

本当のロベールは何処に行ったのか。

「ロベール。一週間後、お前にノルデ公爵位を譲る。他国にもそのことを周知するため大々的に祭典を執り行なうのでそのつもりでいるのだぞ」

この一週間後、俺は正式にノルデ公爵になり、ブリタニア王国皇太子とノルデ公爵を兼務することになった。

周辺各国にもこのことは周知された。

祭典はブリタニア王国に駐在する周辺各国の大使を招き、ブリタニア王国の貴族全てを招集して行われた。

俺が本当の意味で次期ブリタニア国王になった瞬間だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7172x/>

ハルケギニアの獅子心王

2011年11月14日00時41分発行